

ケアを狂わすもうひとつのベクトル

○戸井田晴美（一橋大学・院／日本学術振興会）

研究目的

本研究の目的は、他者の存在はケアをする者（以下、ケアラー）にいかなる影響を与え、どのようにケアラーの行為を変容させるのか、そこにある複雑性を明らかにしようとするものである。現在、子育て、介護、ダブルケアなど、さまざまなケアが存在している。生活上、他者の存在なくして社会は成立しないことから、ここでは、ケアラーとケアを受ける者（以下、ケア対象者）という2者の軸からではなく、それ以外の他者をもうひとつのベクトルとし、そこからケアに与える影響を検証しようとするものである。たとえば、ある親子がいたとしよう。その親子だけでなくその周辺に存在する他者が、いかにしてその親子の関係に影響を及ぼすのか捉えようとする試みである。ケアに影響を与えるのは家族や支援者だけとは限らない。通行人やバスの運転手などの他者が、その場に居合わせた時に、ケアラーとの間に相互行為や一方的な影響が生まれることもある。つまり、自分らしいケアを狂わす存在には、名も知らない他者も含まれるのだ。ではなぜ、ケアラーたちは、この他者の存在から影響を受ける、あるいは敏感にならざるを得ないのだろうか。そして他者からの影響の矛先は、なぜケアラーからケア対象者へと向かうことがあるのだろうか。ここでは、このような繊細な一面を大切に捉えていきたい。

研究方法

本研究は、2019年から2021年の間に蓄積したインタビューデータから顕著な例の2名を抽出し、さらに、新規に2022年に3名に対してインタビュー調査を実施したデータを加え、合計5名の語りから検証を行った。

結果

「私は、公園の砂場で遊んでる息子が砂を投げた時、思いつきで叱ったけど、本当に怒ってるんじゃない。周りに他の親たちがいるからきつく叱るだけ……」この語りからは、仮に公園をこの親子だけが利用していた場合は起こり得なかった「きつく叱る」という行為が発生した状況が見えてくる。つまり、この「きつく叱る」という行為は、親が子に対して抱く感情を飛び越え、他者からの自らに対する子育ての評価を敏感に意識することによって、引き起こされた行為になる。この他者の存在は、時にケアラーにとっての自分らしいケアへの制限となり、「きつく叱る」という行為を受け止める子どもから見た場合、本音の見えない親へと変化させてしまう。そして、他者は、親の思惑とは違って「子どもを怒鳴ってる」と考える可能性も含むという、複雑性がそこにある。

考察

ケアにおける相互行為を捉えようとする際、その多くはケアラーとケア対象者との関係性を軸に考える。そのようななか、本研究では、他者の存在がケアラーにいかなる影響を与えるのか、そこにある複雑性を明らかにした。親子は親と子だけの世界にいるのではなく、他者からの影響を多分に受け、ケアラーである親はその行為を日々変容させながら生活を送っている。そこには、心（本音）と、行為との間に乖離が生じることがあり、ケア対象者を困惑させることもある。これは親子の場面に限らず、施設職員とケア対象者との間においても、同様の状況が確認された。この他者の影響という当たり前にも見える関係性における重要な点は、翻って考えると、誰もが誰かのケアを狂わすもうひとつのベクトルとなりうるという点である。換言すると、誰もが「社会のまなざし」として、そこにあるまちの雰囲気、場をつくる作用を持っているのだ。このような政策や制度の手の届かない「社会のまなざし」は、時に意図せず、「今日は一日叱るまい」と心に誓った親の思いとは、全く別のベクトルへと、いとも簡単に導いてしまうような大きな力を有し、ケアにおける逆説を生むトリガーとなっていた。

謝辞 本研究はJSPS 科研費 21J23026 の助成を受けたものである。

（キーワード：ケア、他者、社会のまなざし）